

私は十代のころから詩をかいているが一人の詩人もグループも知らないで過ごしてきた。詩人たちに遭遇したのはベトナム反戦詩集を出すようになってからである。浅薄な私の詩を打ち据えるような詩と詩人たちとの出会いは私にとって思いもかけないできごとであった。

ひたむきに、自らを包みかくすことなく戦争を挟んでいく詩人の凛乎とした姿勢に私は初めて出会ったのだった。

その詩人たちは今ではみな帰らぬ人となつてしまった。権力に対峙して一歩も退くことのなかった詩と詩人たちを私は忘れない。

果たせなかつた先達の志のいっぺんでも引き継いで私は歩いていく。

二〇〇五年三月には二人の詩人があいついで世を去った。

三月二日栗原貞子九十二歳、二十七日井之川巨七十一歳。ともに反戦争・反原爆・反天皇・平和への志を貫いて濃密な詩を命つきる日までかき続けた。

栗原貞子は天寿を全うされたが私は一度もお会いする機会をもたなかつた。それでもお力添えをねがった三十年に近い歳月は戦後の活動のもっとも充実した時代に重なつていた。原稿も手紙も万年筆でかかれ、作品はすべて書き下ろしで時代を撃つ強い意志に私はゆり動かされてきた。栗原貞子は一九四五年にい

たる戦争の中で戦争を告発する詩をかいてきた筋金の入った詩人である。それが発禁詩集『黒い卵』を生み、『私は広島を証言する』という毅然たる詩集へとつながっていった。国際会議に参加し、デモに参加し、なし得る行動を彼女はいとわなかつた。

栗原貞子は私にとって母のごとき存在であったが井之川巨は一歳違いの同世代の詩人であった。私たち二人は同じ時代に少年期を過ごしてきた。けれど、のほほんくらしてき

二人の詩人への挽歌

長谷川修児

た私とは違い、井之川巨は早くから時代と向きあい、詩を文学を武器として確実に握りはじめた。次々にガリバン詩集を出し、文学集団をつくり、政治活動にはしつたりしながら一筋に詩をかいてきた。井之川に私を紹介したのは野口清子であった。一九七六年五月、井之川は植松安太郎と二人詩結社をつくり詩誌『原詩人』を創刊した。井之川にとって詩は革命・解放の最強の武器であった。

詩の力を信じることに於いて栗原貞子も井之川巨も同じであった。二人の詩を今の若い

人びとに読んでほしいと願いつつ文を結ぶ。

黒い卵をだいて

あなたは巢立った

空の中の空の奥まで

地の中の地の奥まで

原子爆弾をねじこんでいく人間を

あなたは許さない

栗原唯一・原民喜・峠三吉・正田篠枝

大田洋子・長岡弘芳

先んじて行つてしまつた人びとの

切ないまでのたましいを

あなたは重く引き受けて

日々詩をかきつづけた

巨よ

石垣りんの絶唱した
惨劇のサイパン島に

ぼくたちのアキヒトが

祈りをささげにいくのだという

死ぬんじやなかつたと

あなたはじだんだ踏んでいようか

ミチザネの怨霊より激しく

うたびとよ地に落ちよ

(二〇〇五・五・十六)

・栗原貞子詩集(土曜美術社出版販売)
・井之川巨詩集(土曜美術社出版販売)

(はせがわ・しゅうじ、詩人、月報『遊撃』発行人)